

二階堂氏屋敷遺跡

発掘調査報告書

2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

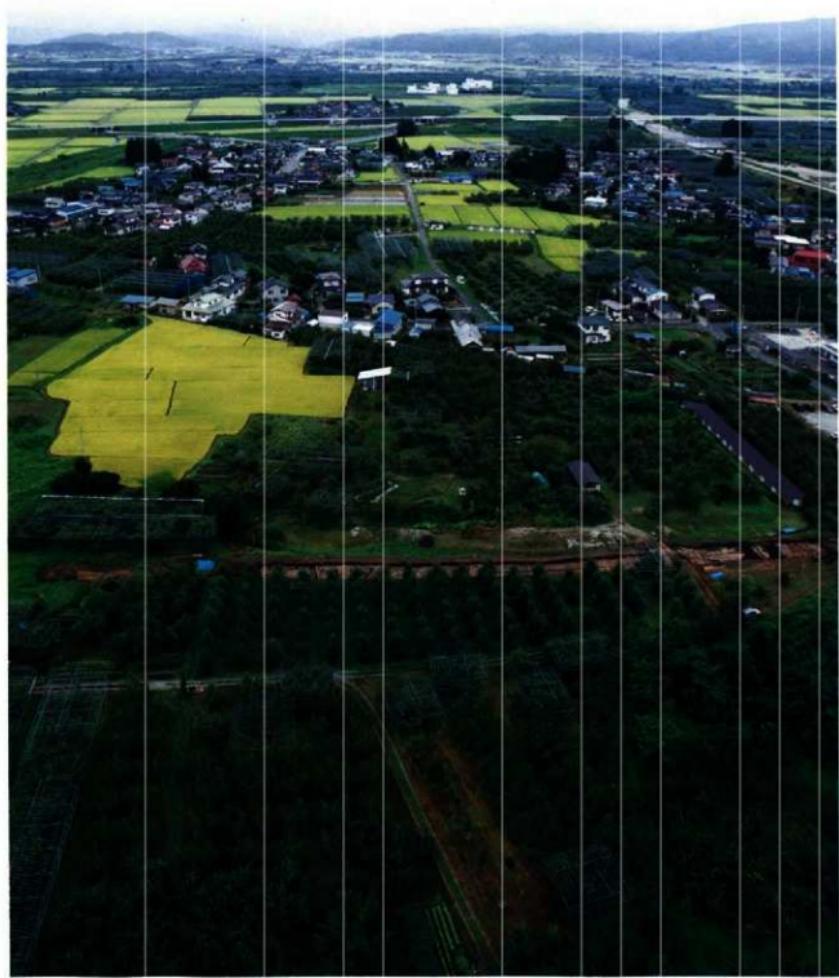
に　かい　どう　うじ　や　しき

二階堂氏屋敷遺跡

発掘調査報告書

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景（東から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、二階堂氏屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

二階堂氏屋敷遺跡は天童市の中心より北西部の成生大清水地区にあり、北に乱川、南西に押切川と2本の河川に挟まれた扇状地に位置し、現在は水田・果樹地帯となっています。

この度、山形県農林水産部の一般農道整備事業（成生地区）に伴い、工事に先立って緊急発掘調査を実施しました。

調査ではこれまでの研究成果から、中世に勢力を持ってこの地を支配した二階堂氏の城館跡でないかと伝えられています。内部や四方に張り巡らした堀跡は発掘調査の対象にはなりませんでしたが、当時の人々の生活の一端や館跡との関連を示す貴重な手がかりが出来たのではないかといえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫に伝えていくことが、私たちの重要な責務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木 村 幸

例　　言

1 本書は山形県農林水産部の一般農道整備事業（成生地区）に係わる「二階堂氏屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は次のとおりである。

遺　　跡　名	二階堂氏屋敷遺跡	遺跡番号	301
所　　在　地	山形県天童市大字大清水字二階堂		
調　　査　主　体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
委　　託　期　間	平成13年4月1日～平成14年3月31日		
現　　地　調　査	平成13年9月3日～平成13年9月28日		
調　　査　擔　当　者	調査第一課長	野尻 優	
	主任調査研究員	黒坂 雅人	
	調　　査　研　究　員	福澤 美幸（調査主任）	
	調　　査　研　究　員	植松 晓彦	
	調　　査　研　究　員	岡崎 賢一	
	副　　調　査　員	衣袋 忠雄	

4 発掘調査および本書を作成するにあたり、山形県農林水産部、天童市経済部農林課、天童市教育委員会等関係機関に協力をいただいた。また資料整理にあたっては下記の方々からご教示を賜った。

川崎利夫氏（うきたむ風土記の丘考古資料館）、阿子島功氏（山形大学）、相田俊雄氏（山形考古学会会員）

5 本書の作成・執筆は福澤美幸、植松晓彦、岡崎賢一、衣袋忠雄が担当した。編集は須賀井新人、松田道雄が担当し、全体については野尻 優が監修した。

6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測	株式会社ジーイエス仙台
理化学資料分析	株式会社古環境研究所

7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S D…溝跡・溝状遺構・堀跡	S K…土坑	S P…ピット
S X…性格不明遺構	R P…登録土器・陶磁器	R Q…登録石器・石製品
X O…表面採集遺物及び出土地点不明遺物		S…石

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1)遺構概要図・遺構位置図に付す座標値は、平面直角座標系第X系による。図中の方位は座標北を示す。

(2)グリッドの南北軸は、N-09°30' - Eを測る。

(3)遺構実測図は1/40の縮図で採録し、各々スケールを付した。

(4)遺構実測図・拓影図・図版は、各々同じスケールで採録し、遺物実測図・拓影図にスケール及び縮尺値を示した。なお、拓本は右側に内面、左側に外面を配置した。

(5)本文中の遺物番号は、遺物実測図・図版とも共通のものとした。

(6)遺構・遺物実測図中の「F」は遺構覆土中を示す。

(7)遺構覆土の色調の記載については、1999年農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
3 遺跡の層序	7
III 中世の造構	
1 造構の分布	9
2 堀跡・溝跡	9
3 土坑	9
IV 出土遺物	12
V 天童市教育委員会所蔵遺物	12
VI 調査のまとめ	15

付編

二階堂氏屋敷遺跡における自然科学分析

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第7図 SK5・SD1・SD2・ SX6・SX34・SX35	11
第2図 地形分類図	4	第8図 出土遺物	13
第3図 遺跡概要図	5	第9-1図 二階堂館推測図	14
第4図 造構配置図	6	第9-2図 二階堂付近地形図	14
第5図 基本層序図	8	第9-3図 天童市教育委員会所蔵遺物	14
第6図 SD7・SK15・SK16	10		

図 版

卷頭図版1 調査区全景	図版4 SD2完掘状況他
図版1 調査区全景	図版5 出土遺物(1)
図版2 造構検出状況他	図版6 出土遺物(2)
図版3 SD1完掘状況他	天童市教育委員会所蔵遺物

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

本遺跡は天童市の北西部にあり、奥羽山系に源を発する乱川、押切川によって形成された扇状地の扇端部、自然堤防上に所在する。しかも、本遺跡はすぐ近くを流れる両河川に挟まれ、付近一帯が大清水、成生の地域名に見られるように、豊かな地下水に恵まれた地域である。

昭和50年代に全県一斉の遺跡確認調査が実施され、天童市管内には114遺跡が確認された。県教育委員会では遺跡保護の立場から、遺跡の所在・範囲・内容等を「山形県遺跡地図」に登載して、開発事業に対する調整資料にしている。本遺跡は中世の方形館跡として遺跡登録(301番)がなされている。

今次の発掘調査は平成13年度山形県農林水産部の一般農道整備事業（成生地区）に伴い、実施したものである。

本調査に先立ち、山形県教育庁文化財課（現山形県教育庁社会教育課文化財保護室）が平成11年12月14日～15日に、事業実施予定内の遺構・遺物の分布や土層の確認、遺跡の範囲・性格などを調べるために、屋敷跡東の空堀の外側部分について、遺跡詳細分布調査を実施した。

その結果、土坑や溝跡などの遺構や少量の陶磁器が検出され、本屋敷跡との関連が東空堀の外側にも分布することが判明した。遺跡範囲は120m四方の方形館跡及び空堀東側の張り出し部分を合わせて、約17,000m²と推測される。一般農道整備事業が遺跡範囲に係わることになるため、県農林水産部と県教育委員会は現状保存を前提とした事前調整を行った。さらに平成13年8月17日に県教育庁社会教育課文化財保護室と県農林水産部、天童市農林部、天童市教育委員会など関係機関による遺跡保護に向けての協議を重ねた結果、遺跡範囲内で工事計画により、やむを得ず削平を受ける区域内の600m²について、県教育委員会より委託を受けた財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施する運びとなったものである。

2 調査の方法

現地調査は平成13年9月3日から9月28日までの実質19日間の日程で実施した。発掘器材搬入から始まり、調査区設定内の範囲と深さを示す溝堀り、重機による耕作土除去と並行して面整理と遺構検出作業を行っている。

また、遺構や遺物の位置関係を正確に記録するために5m×5mを1単位とする方眼区画（グリッド）を設定した。グリッドの南北軸は磁北から09°30'東に振れる。南北軸にはアラビア数字による番号を北から、東西軸にはアルファベットによる記号を西から割り当てた。

その後、遺構精査を行い、適宜、遺構平面図、断面図、遺物・遺構検出状況を図面と写真に記録した。26日には空中写真測量を実施、27日に50名の参加者を得て調査説明会を現地で開催した。28日は器材を撤収し、現地調査は終了した。これまでの調査の成果は諸整理作業や考察を加え、発掘調査報告書として平成13年度内に発刊される。



- 二階堂氏屋敷遺跡（平安・鎌倉・室町）
 - 高野坊遺跡（繩文・平安・鎌倉）
 - 成生橋（中世）
 - 成生古墳群（古墳）
 - 金谷遺跡（繩文・鎌倉）
 - 北畠遺跡（奈良・平安）
 - 高木樅（室町）
 - 天童織田樅（江戸）
 - 西沼田遺跡（古墳）
 - 蔵増押切遺跡（古墳・奈良・鎌倉）
 - 蔵増城（室町～江戸）
 - 板橋1遺跡（繩文・古墳）
 - 板橋2遺跡（繩文・弥生・古墳）
 - 坂の場遺跡（古墳）
 - 一楽塙遺跡（鎌倉・室町）
 - 蔵増北B遺跡（奈良・平安）
 - 坂の場遺跡（古墳）
 - 一楽塙遺跡（鎌倉・室町）
 - 蔵増北B遺跡（奈良・平安）

第1図 遺跡位置図（国土地理院発行2万5千分の1地形図「塞河江」「天童」を使用）

II 立地と環境

1 地理的環境

本遺跡は天童市北西部の成生地区「大清水」に所在する。奥羽山系を源とする乱川が350m北を西流し、400m南には西北に流れる押切川の両河川によって形成された複合扇状地の扇端、乱川左岸自然堤防上に立地する。扇端部の堆積土層は粘土質からなる。乱川を挟んで北は東根市の荷口、羽入地区に隣接している。

西方2km先で両河川は山形県内を貫流する最上川に合流する。対岸は寒河江市、中山町である。標高は93mを測る。

本遺跡付近は大清水の地名の如く、豊富な湧水地帯で、その水源を利用して、人々は農耕など様々な生活に従事してきた。現在、遺跡周辺は稲作や果樹栽培などが盛んで、成生、高木、小関、藏増、今町などの集落が散在し、田園地帯を形成している。虹鱒の養殖を営む農家も存在する。

今次発掘調査をした区域の西側には、幅12m前後、深さ0.5~1m前後の堀で囲まれた一町四方の方形館跡がある。現在、堀跡には雑草が生い茂り、土砂で埋まっているとはいえ、湧水のある地点では清んだ水をたたえ、方形館北側と東側に明瞭な水堀の跡を残している。郭内外は果樹園に、北側の堀は鱒の養殖場に利用されている。東側の堀は以前は水田に利用されていたが、今は空堀の状態となっている。

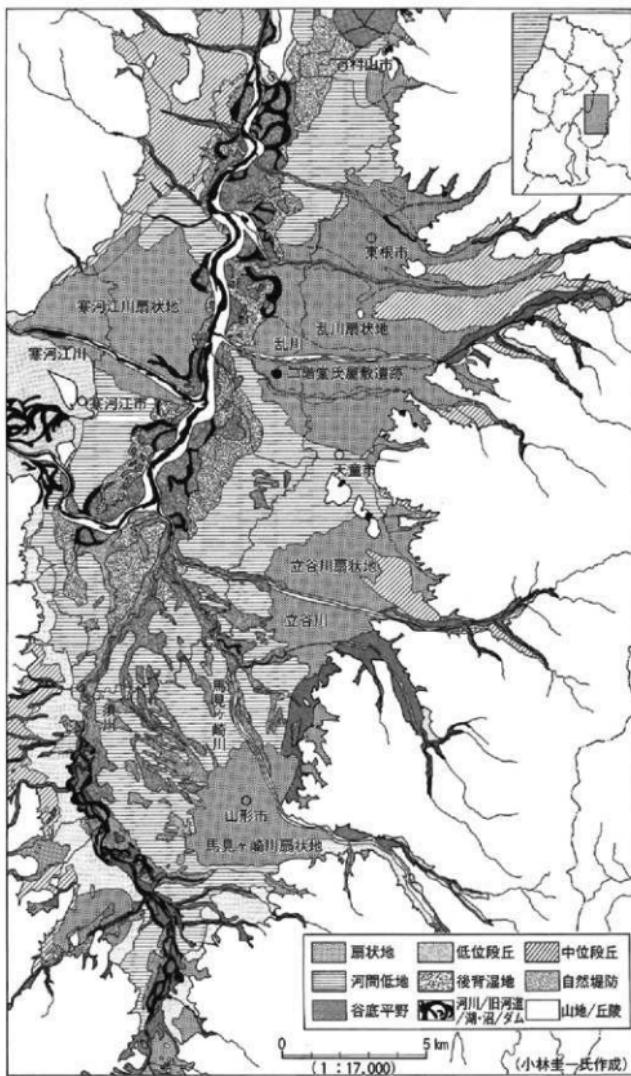
本遺跡西方には、県内陸部の交通網の大動脈となるべく、東北中央自動車道の建設が進められ、周囲の景観が徐々に変貌しつつある。

2 歴史的環境

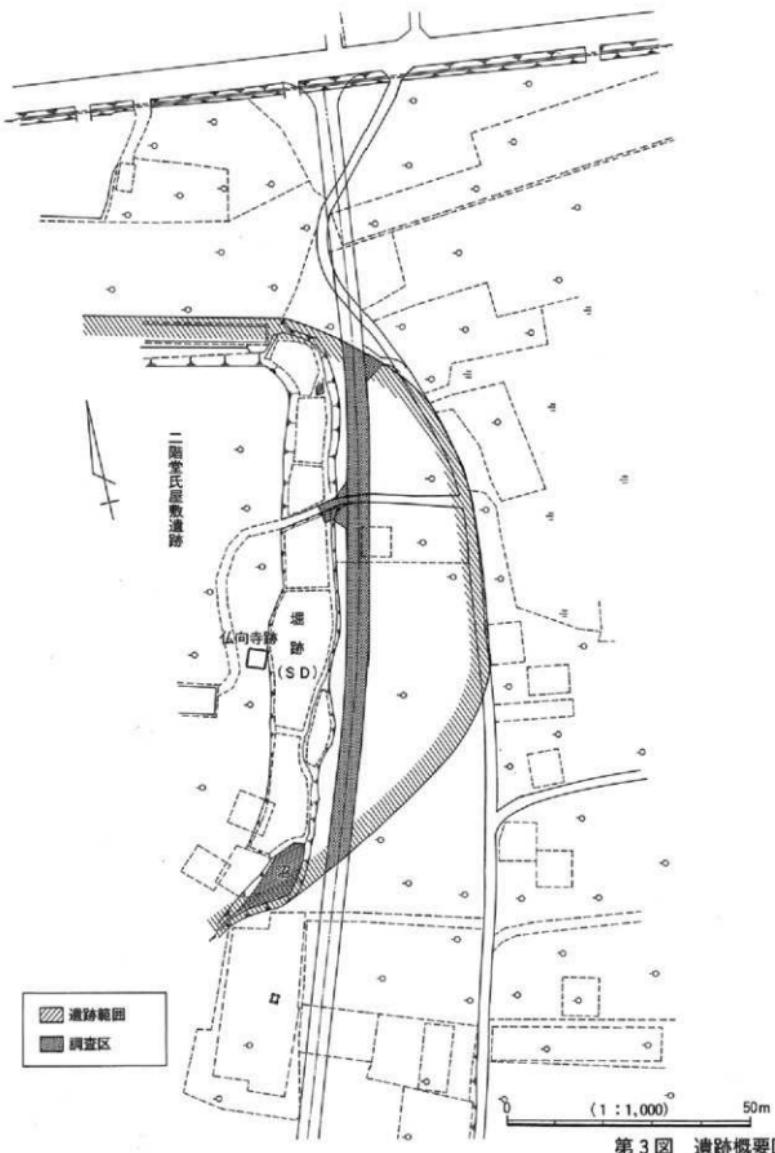
本遺跡周辺には古くから人々が住みついたと思われる多くの遺跡が、本遺跡を取り囲むように点在している。成生の後藤原、爪小屋、金谷、熊野堂前、地蔵池A、B、八反記田遺跡などからは縄文時代中・後期の土器や住居跡が検出されている。

本遺跡から南100m先には高野坊遺跡がある。平成8年に特養老人ホームの建設に先立って緊急発掘調査が天童市教育委員会によって行われた。その結果、縄文土器片や住居跡を検出、さらに平安~鎌倉時代の住居跡や線刻碟のほかに、墨書碟を埋納した土坑などが多数検出、その中で「御庄、政所、藤原」など、成生荘との関連が推測される墨書碟が出土している。

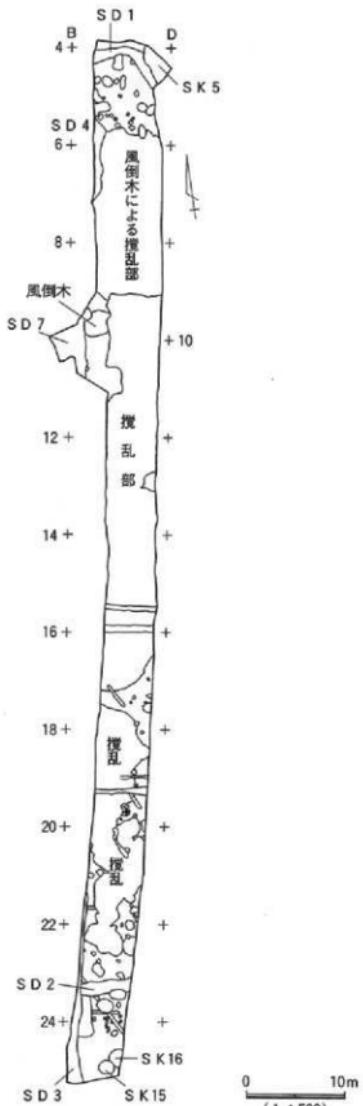
本遺跡の屋敷内の発掘調査はまだ行われていないが、1991年に川崎利夫氏及び成生荘研究会は郭内部の西北隅、10m²を地区民の協力を得て試掘調査を実施している。「地表下48cmの黄褐色土層より、掘立柱痕跡を2箇所確かめたこと、柱間寸法1.9m、柱穴径約20cm、南北棟と考えられる建物跡を検出、鉄鎌と推定される鉄製品も出土、磁北に忠実に建てられていること、建物は位置からして主屋ではなく、それに付随する納屋か倉庫と思われること、古代末か中世初頭の建物であることは柱間寸法などの状況からも読み取れる。」と述べている。^(註1)しかし、2箇所のみの柱痕跡だけでは推定の域を脱しきれず、今後の本格的調査が必要である。



第2図 地形分類図



第3図 遺跡概要図



第4図 遺構配置図

1997年天童市教委も確認調査で郭内の中央よりやや北の70m²を試掘し、灰釉の古瀬戸瓶子破片や硯の一部を検出している。

本遺跡から500m南の押切川左岸には成生館が所在し、古墳時代末期の箱式石棺も発見されている。

西方には鎌倉・室町時代の墳墓が検出した一楽塙遺跡があり、扇状地末端部には板橋1、2遺跡、的場など縄文～古墳・奈良時代の遺跡が南北に立地している。

本遺跡付近は近隣の高野坊遺跡の出土遺物などや二階堂氏という地名から、これまで一般的に調査研究の成果や諸文献には、「古代から中世にかけての地方豪族の屋敷が方形館のような形態であるなら、成生莊の中核部にあたり、庄家など政治的中心施設がこの地にあった可能性も否定できない。さらに成生莊の地頭として鎌倉幕府から派遣された御家人、二階堂氏に係わるところから二階堂氏の館跡と推測されるが確証はない」(注2)と述べている。

方形館跡の郭内中央より東堀跡付近の果樹園の一角に、「名称宝樹山仏向寺跡」の立て札が建っている。弘安元年(1278)に成生莊官の招請により一向上人がこの地に創設したと伝えられているが、時宗の寺院が方形の堀で囲まれた場所に建立することはない。草塔程度のものであろうとも言われている。(注3)

注1.『天童ひろば24号』(1991)「大清水の二階堂遺跡」川崎利夫著

注2.『山形県史』・『天童市史』他

注3.『天童5号』「考古学から見た天童(4)なぞの二階堂屋敷」川崎利夫著
他

3 遺跡の層序

本遺跡（方形館）の範囲は、一辺約120mの概ね一町四方を測り、主郭等の標高は約93m前後を測り、堀跡部分は約92mを測る。遺跡の標高最高点は北東角の堀跡外側（調査区北半部）にあたり約94mで、調査区南北や周囲の地形と較べて一段高い高まりを見せる。この高まりは調査区北半部（5～9グリッド付近）の地山を形成する旧乱川やその支流と目される河床疊層が成因と考えられ、南東から北西方向へ帯状に標高約94mのラインとして地形に表出する。調査区内における基本層序は以下の通りである。

- I層：暗褐色粘質シルト（耕作土）
- II層：暗褐色シルト（果樹畑による褐色土）
- III層：灰黄褐色シルト（遺構検出面）
- IV層：黄褐色微砂（地山）

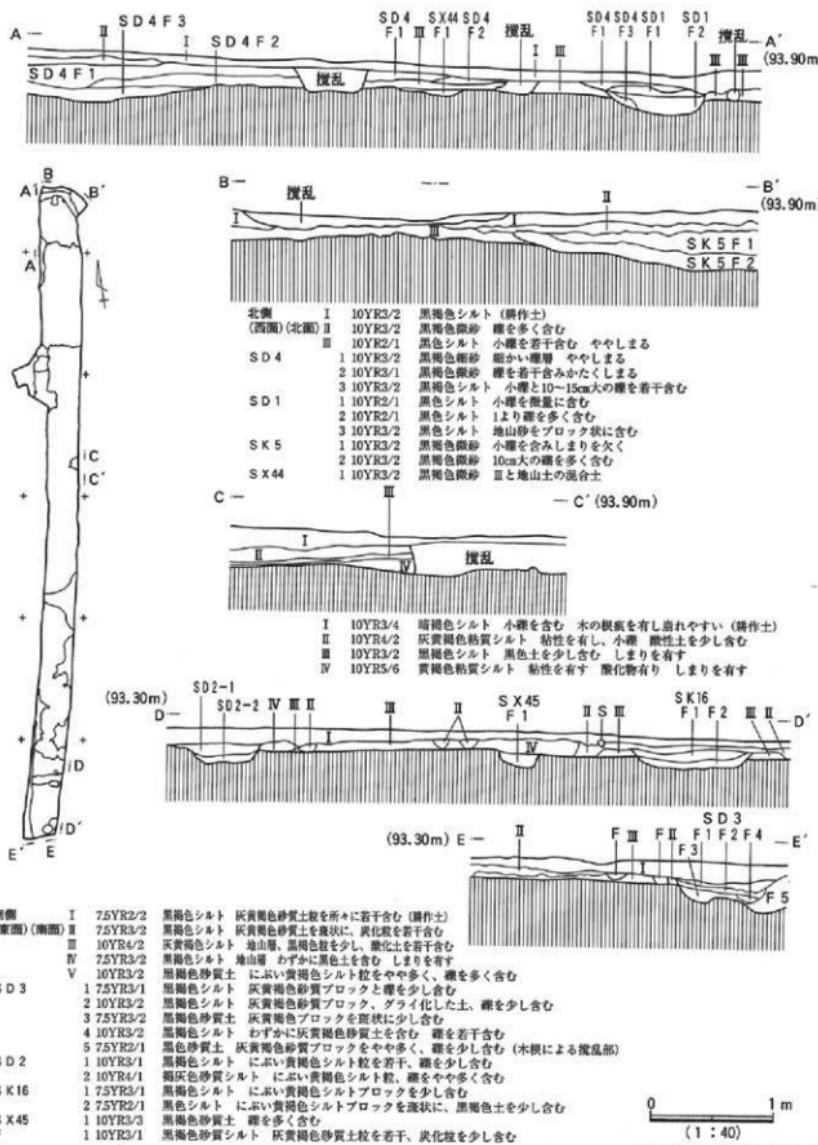
以下、調査区北半・中央部・南半の土層状況を概観する。

調査区北半は、前述した河床疊層を一部地山とする一段高い地形で、今調査で最も堀跡に近接する。調査区西壁際でSD4とした堀跡の最縁部が、大形の風倒木痕を切り、一部を検出された。堀跡に直交する土層断面からは、地山にあたる河床疊層を急斜する掘りこみが認められ、西壁際の土層で最も深い部分は現地表面から約50cm確認できた。覆土は、暗褐色微砂層と疊層の互層で、崩落土や堆積土の可能性もあるが、堀跡外側の縁部の立ち上がりにあたる事から、当時の堀の旧表土や堀の崩落を防ぐ土留め、堀をさらった際の残土等が表出しているものと考えられる。しかし、調査区の制約から検出幅が僅かで具体的な覆土の内容は判断できなかった。また、調査区北端においてSD1とした小規模の溝跡がほぼ堀跡に直交して確認された。

調査区中央部は、地形が南に向かってスロープ状に低くなる傾斜変換点であった。現農道との取り付け部からは、堀跡を検出することができた。堀跡底面の東側にあたる現農道盛土の直下にトレチを設定できたが、既に堀跡外側の立ち上がり部は、現農道に使用され削平を受け、堀跡に直交する土層は把握できなかった。しかし、現農道に接する調査区西壁からは概ね北半部と類似した層序が看取られ、トレチ調査では中央部の堀跡底面が、北半部の現堀跡底面（水田面）とほぼ同レベルである事が窺えた。

調査区南半部は北半部と比して一段低い地形で、土層や平面プラン等から近現代の土取りや暗渠等が確認され、地元民によれば以前果樹を植え替える際に重機等で床土や表土を入れ替えたとの事で、特に中央～南半部に至っては大半が掘削を受けた状況であった。調査区南端の西壁際でSD3とした堀跡縁部が確認され、その堀跡縁部に直交し切られるSD2溝跡も検出された。西壁土層からは土取り等の直下で堀跡縁部が確認され、上部の削平は著しいが、検出レベル等から堀東壁の中～下位にあたると推測され、覆土は砂を含む暗褐色土の堆積土である。

今調査では、調査区中央～南半の大半が掘削等により地山が削平を受けている事もあり、遺構の分布は全体に希薄であった。更に調査区が東辺堀跡の外側の最も堀跡に隣接する部分で、構造的にも土塁や建物等の存在は考えられず、元来遺構などが希薄であった可能性が高い。



第5図 基本層序図

III 中世の遺構

1 遺構の分布

二階堂氏屋敷遺跡で検出された遺構は、屋敷跡の堀のすぐ東側ということもあり、堀跡3条、溝跡2条、土坑3基と僅かであった。調査区の中央部は、風倒木や、暗渠排水、近現代の果樹などによる搅乱などにより、遺構の検出が希薄であった。検出できたのは南北両端の僅かなところである。現在の堀は第3図に示しているが、自然条件や、人為的なことなどにより堀の形が変化していると推測される。南北の堀に平行している堀跡の一部を検出した（SD3・4・7）。溝跡は堀跡に直行した形で南北に2基検出された。北側に深さのある土坑が1基、南側に北側と対照的な浅い土坑が2基検出された。

2 堀跡・溝跡

SD3堀跡（第4図）21～26-A・Bグリッドに位置する。堀跡南側の最縁部と考えられる。堀跡に直交する土層断面からはやや急斜な掘り込みが確認される。最深部で約32cmを測る。覆土は5層に分かれが、F1～3の3層が主体で黒褐色シルト層と黒褐色砂質土よりなる。

SD4堀跡（第4図）5～8-Bグリッドに位置する。堀跡北側の最縁部と考えられ、大型の風倒木痕を切る。堀跡に直交する土層断面からは地山にあたる河床疊層を急斜する掘り込みが認められ、最深部で約50cm確認できた。覆土は暗褐色微砂層と疊層の互層である。

SD7堀跡（第4・6図）9～11-A・Bグリッドに位置する。堀跡中央部東側の一部である。深さは検出面より約80cmを測る。覆土は7層に分けられるが、F1～4・6層の5層が主体である。F3・6層は泥炭様で疊を含みしまりを欠く。F5・7層は崩落土である。

SD1溝跡（第4・7図）3・4-B・Cグリッドに位置する。SK5・SX6に切られる重複関係を持つ。調査区外に延びており、全形は明らかでない。規模は、長軸約3.56m、深さは検出面から約8～12cmを測る。断面はU字形を呈し、緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分かれ、F2層には少し小疊が含まれる。遺物は、底面より株洲系陶器（4）が出土している。

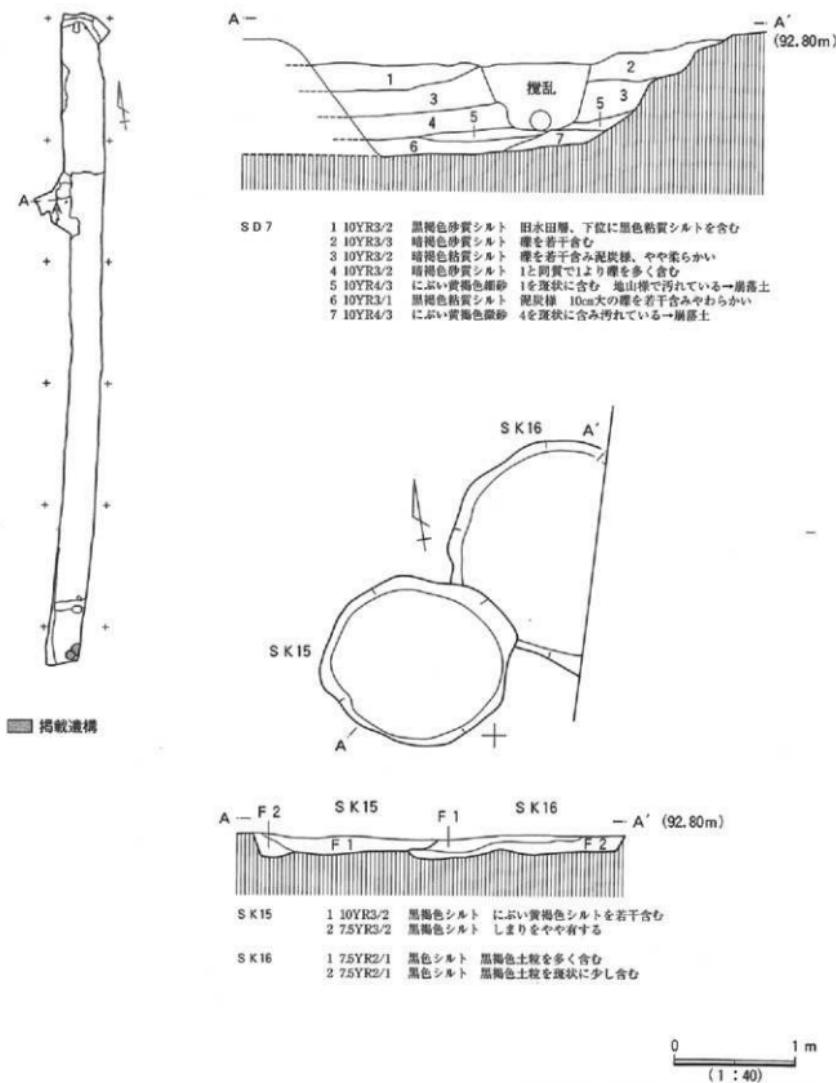
SD2溝跡（第4・7図）23-B・Cグリッドに位置する。SX34・35に切られる重複関係を持つ。調査区外に延びているために、全形は明らかではない。規模は、長軸約2.5m、深さ検出面から約16cmを測る。断面はU字形を呈し、底部はほぼ平坦である。覆土は2層に分かれ、F2層には若干疊が含まれる。遺物は覆土より青磁破片が出土している（8）。

3 土坑

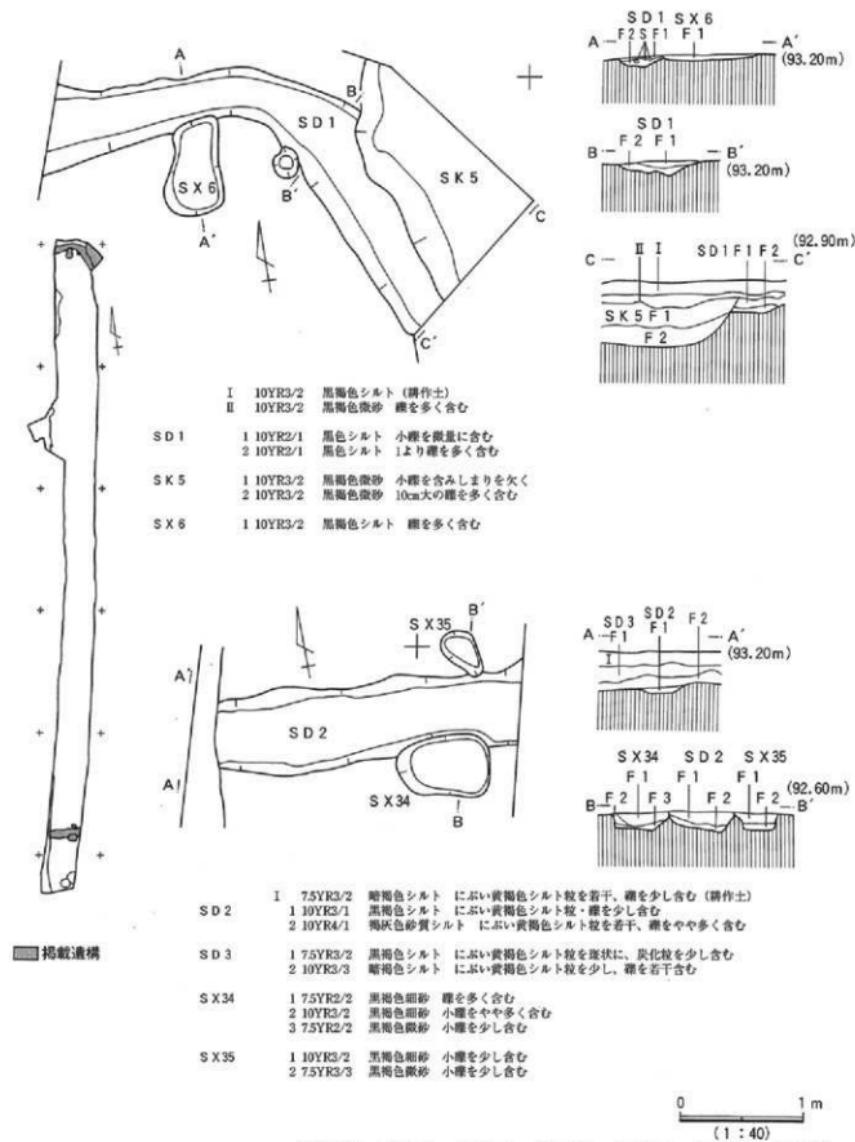
SK5（第4・7図）3・4-Cグリッドに位置し、SD1を切る重複関係を持つ。調査区外に延びており、全形は不明であり、深さ54cmの規模を有する。覆土は2層からなり、F2層は疊を多く含む層である。遺物は、須恵器甕片（3）がF2層より出土している。

SK15（第4・6図）24・25-Bグリッドに位置し、SK16を切る。平面は橢円形を呈す。

SK16（第4・6図）24-Cグリッドに位置、調査区外に延びている。SK15に切られる。平面形は不明である。



第6図 SD7・SK15・SK16



第7図 SK 5・SD 1・SD 2・SX 6・SX 34・SX 35

IV 出土遺物

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして2箱である。出土した遺物は破片が多く時代が縄文時代から近代までと幅広く出土している。

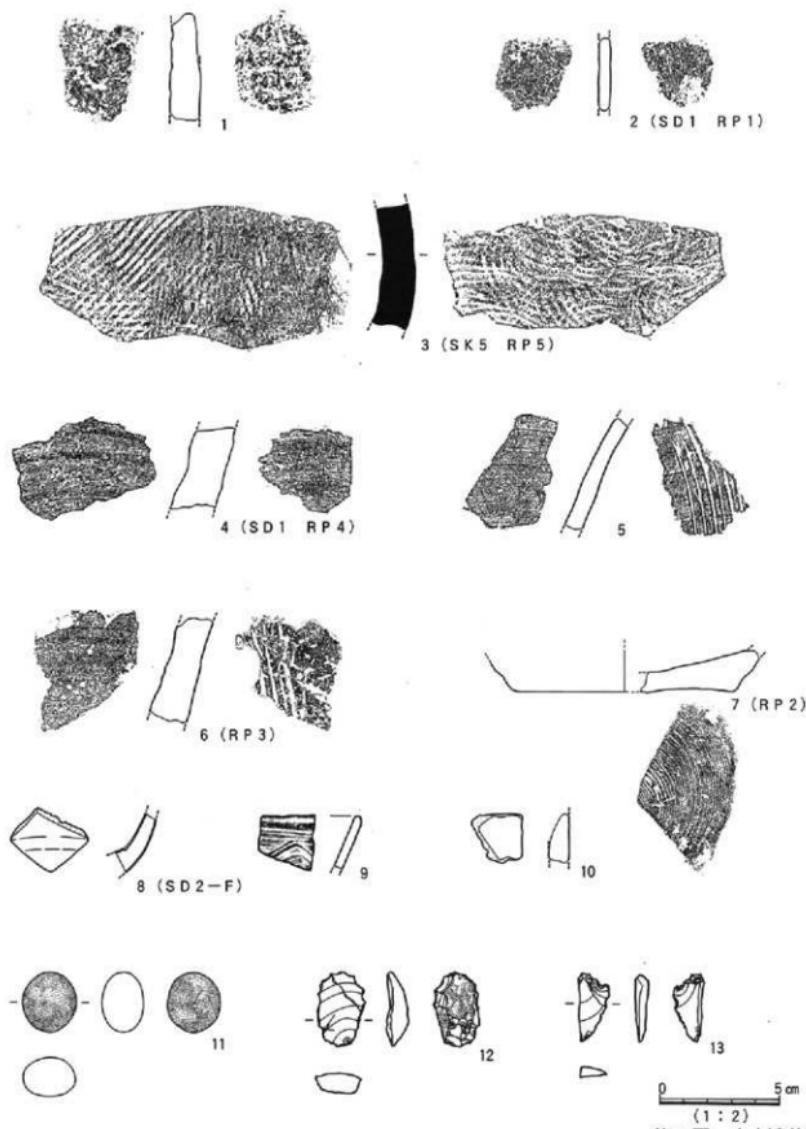
遺構からの出土は、第8図2・3・4・6・7・8で他は、包含層からの出土である。2は土師器の破片で器厚は4.5mmで、磨消しているが内外面にハケメ調整が施されている。3は須恵器の壺の体部破片で、器厚は13mmである。内外面に大きなハケメ調整が施されている。4は珠洲系陶器の壺で、器厚は16mmである。内外面ロクロ調整が施されている。6は陶器の擂鉢で、器厚は14mmである。内面に4条の摺り目が施されている。7はかわらけの底部で、底径約92mm、器厚10mmである。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。8は青磁で、器厚は5.5mmである。内外面に青磁釉が施され、内面の見込み部に沈線状のくぼみが見られる。

包含層より出土の遺物は第8図1・5・9～13である。1は内外面ともかなり磨消しており、胎土より縄文土器と推測される。器厚は12.2mmである。5は陶器の擂鉢で、器厚は6.3mmである。内外面にはロクロ調整が施されている。内面には、6条の摺り目が施されている。9は肥前系陶器・いわゆる唐津焼の碗の口縁部で、器厚は3.2mmである。外面は白泥でハケメ調整が施される。10は焜炉の一部である。12・13は剥片で12は玉髓、13は頁岩である。

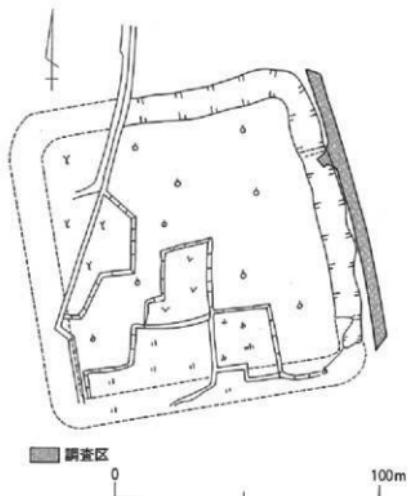
V 天童市教育委員会所蔵遺物

二階堂氏屋敷遺跡は、堀跡を残す一町四方の方形館である。第11図は、方形状を呈する堀に囲まれた主郭部内を、天童市教育委員会で確認調査した際に出土した遺物である。二階堂氏屋敷遺跡の性格を考察する上で参考になる遺物である。同教育委員会の協力のうえ縄文土器・中世陶器・石硯について実測・撮影を行うことができた。若干の所見を記して性格等の参考資料としたい。

第11図1は縄文土器後期中葉の台付鉢の台である。やや研磨されており胎土がもろく、無文の土器である。器高は約127mm、器厚は約8mm、底径約108mmを測る。後世の流入であろう。2は中世陶器で古瀬戸の瓶子の肩部である。器高は約21mm、器厚は約13mmを測る。外面は灰釉が施され、内面には指頭による器面成形痕が認められる。外面の施文は肩部に4本の櫛描文が施され、その下部に印花文が認められる。形態や施文より14世紀後半後1期に位置づけられ（瀬戸市埋文：1997）、本遺跡の存在時期にあてはまる遺物と推測される。3は中世の石硯である。長さ約41mm、幅約59mm、器厚約11mmを測り、石材は堆積岩である。陸部・海部が欠損している。使用する際の海部最深部の前方に、縦18mm、横24mm、深さ約4mmの楕円形状のくぼみを中心部に持つ。表面の淵には、沈線が海部最深部前方には2本、海陸部には1本施されている。作りが非常に良く、淵が細く細工してあり精巧な技術が見られ良品である。



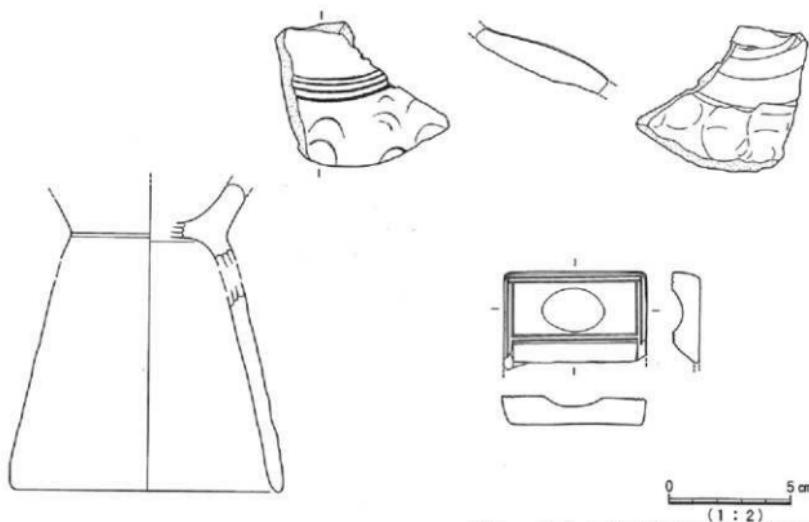
第8図 出土遺物



第9-1図 二階堂館推測図〔天童の城と館〕より)



第9-2図 二階堂付近地形図〔天童市史」別巻より)



第9-3図 天童市教育委員会所蔵遺物

VI 調査のまとめ

今回の調査は、一般農道整備事業（成生地区）に伴う緊急発掘調査である。調査の結果を要約すると、以下のようになる。

(1)二階堂氏屋敷遺跡は天童市に所在し、天童市中央部を流れる乱川と押切川に挟まれた乱川扇状地の扇端部に立地する。遺跡の面積は一町四方の方形館を中心に約17,000m²である。今回は最も遺存状況の良好な堀跡の東側約600m²を調査した。遺跡の四至は第9図-1に示したが、東・北辺は明確な幅15~20mの堀跡や一段高い主郭部が認められる。遺存状況の良好な北東角の堀跡底面から主郭部頂点までの比高差は約2mを測る。堀跡西・南辺は、宅地造成や水田、果樹畠の開墾に伴い削平が著しく、堀跡の痕跡が所々で推測できるほどである。

(2)検出された遺構は、堀跡・溝跡・土坑などである。調査区は堀跡と平行しており、西側には堀跡の一部が検出された（SD3・4・7）。SD3・4は堀の縁で崩落土または堆積土と推測される。溝跡（SD1・2）は規模が類似し、堀跡に直交し、並走することから両者の関連性が窺える。両者は、更に東に走行することから、方形館外の二階堂氏屋敷遺跡に関係する遺構群の一つとして考えられる。具体的には、方形の堀跡に囲まれた主郭に付属する、東側の張り出し状の外郭部を廻る溝等と推測され、今後の調査に期待される。

(3)出土した遺物は、土師器・須恵器・珠洲系陶器・かわらけ・青磁・肥前系陶器・石器などである。今回の調査区は二階堂氏屋敷遺跡の東堀外にあたるため出土遺物数は少ないが、館跡に直接関連する遺物は珠洲系陶器・かわらけ・青磁である。いずれも中世の遺物であるが、破片であり館跡の明確な時期を決定する資料の検出には至らなかった。しかし、天童市教育委員会が確認調査を実施した際出土した古瀬戸の瓶子により本遺跡は14世紀後半に推測される。

(4)本遺跡の所在する成生地区は、現在の天童市を莊園領域とする古代末から中世に存在した成生莊の政治的中心地と考えられる。本遺跡は、地名より鎌倉時代の成生莊地頭の可能性がある二階堂氏の館跡か、莊園の莊家と推定されるが、依然として、本遺跡は解明されていない。一町四方の大規模な堀跡を廻らす館の形態や、乱川の水上交通を意識した立地条件などから、成生莊の成立時期に存続した館跡と考えられる。現在の堀跡は空堀となっているが、「大清水」の字名通り湧水が豊富な地域であり、分析結果によると、堀は帶水していた可能性がある。

[参考文献]

天童市史編さん委員会：1981『天童市史上巻原始・古代・中世編』

天童市史編さん委員会：1978『天童市史別巻上地理・考古編』

川崎利夫：1993「天童市内の城館跡」天童市教育委員会・旧東村山郡役所資料館

『天童の城と館』

川崎利夫：2001「方形居館の出現と展開」「山形考古」第7巻第1号

山形県教育委員会：1995『山形県中世城館遺跡調査報告書第2集』

村山正市他：1996『高野坊遺跡確認調査報告書』天童市埋蔵文化財報告書第12集

瀬戸市埋蔵文化財センター：1997『研究紀要第5輯』

報告書抄録

ふりがな	にかいどううじやしきいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	二階堂氏屋敷遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第102集							
編著者名	福澤美幸 植松暁彦 岡崎賢一 衣袋忠雄							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-673-5301							
発行年月日	2002年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にかいどううじやしきいせき 二階堂氏屋敷 遺跡	やまがたけだてみどりし 山形県天童市 おおぬあざねし みず 大字大清水 あざに かいどう 字二階堂	6210	301	38度 22分 19秒	140度 20分 57秒	20010903 ~ 20010928	600	一般農道 整備事業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
城館跡	中世	堀 溝 土坑	3 2 3	須恵器(甕) 珠洲系陶器(擂鉢) 窯器系陶器 青磁(碗) かわらけ				一町四方の方形城館の外堀 に直交する2本の溝跡を検出。 外堀の一部を検出。 (出土箱数: 2)

図 版



調査区全景

図版 2



遺構検出状況（南から）



堀跡断面（南から）



SD 1 完掘（東から）



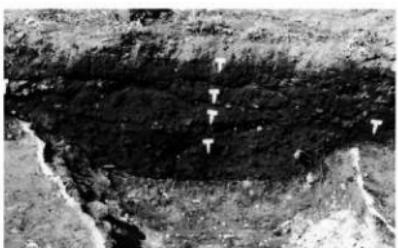
面整理作業（南から）



SD 1 検出状況（東から）



基本層序 南壁（北から）



SD 1 断面（東から）

図版 4



SD 2 完掘状況（東から）



SD 2 検出状況（東から）



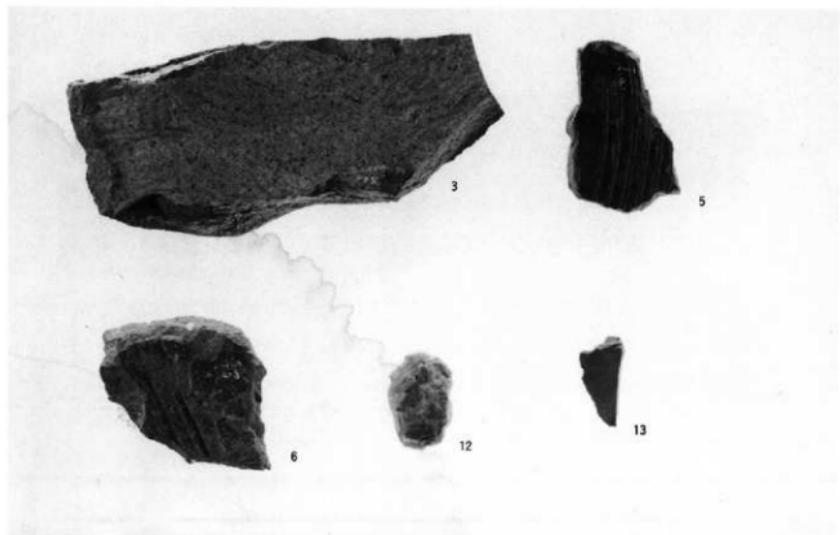
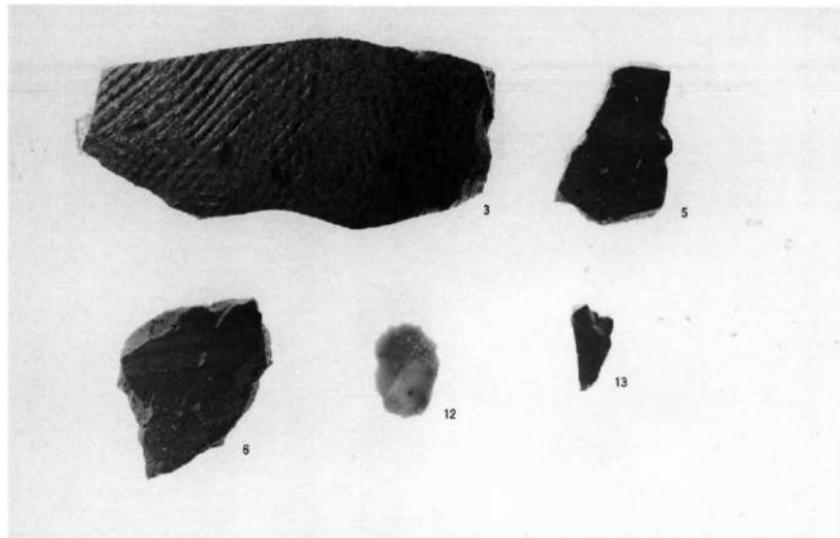
堀跡検出状況（南から）



SD 2・SX34・SX35断面（西から）

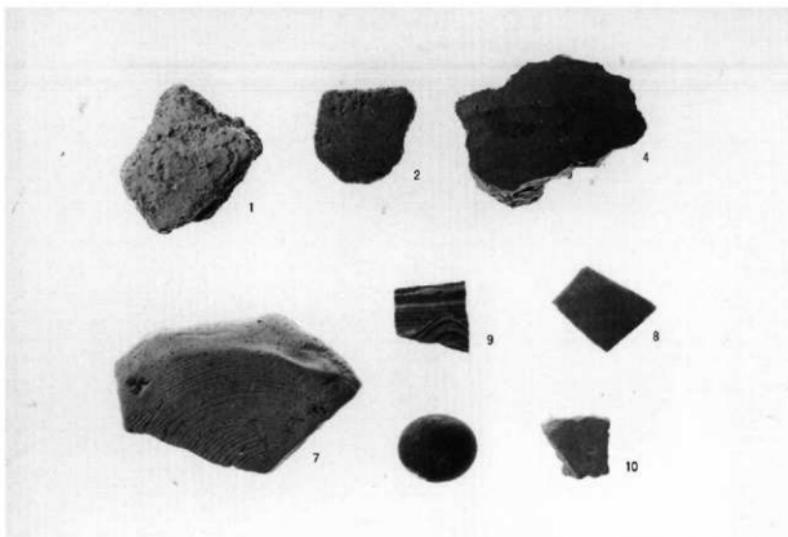


南側 東壁断面（北西から）

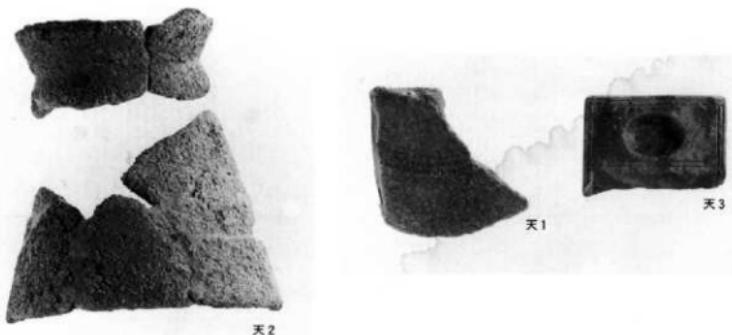


出土遺物（1）

圖版 6



出土遺物 (2)



天童市教育委員會所藏遺物

付 編

二階堂氏屋敷遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 二階堂氏屋敷遺跡における花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

試料は、二階堂氏屋敷遺跡（中世の館跡）の堀跡の堆積物で、上位から I 層、II' 層、F 2 層、F 3 層、F 4 層、地山の各層より採取された 6 点である。

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5% 水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。
- 4) 水洗した後、冰酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。
- 5) 再び冰酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2 分間）の後、上澄みを捨てるという操作を 3 回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって 300~1000 倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフォン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉25、シダ植物胞子2形態の計45である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。なお、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

[樹木花粉]

マツ属複維管束亞属、マツ属單維管束亞属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、ニワトコ属—ガマズミ属

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科—イラクサ科、ウコギ科

[草本花粉]

ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、シソ科、タヌキモ属、オオバコ属、タンポポ亞科、キク亞科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

單条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

花粉群集の特徴とその変遷により、下位からⅠ帶、Ⅱ帶、Ⅲ帶の花粉分帯を設定した。以下、花粉分帯に沿って花粉群集の特徴を示す。なお、F3層、地山より採取された堆積物は、花粉密度が非常に低かった。

1) I 帯 (F4層)

草本花粉の占める割合が非常に高い。特に、イネ属型を伴うイネ科およびカヤツリグサ科が優占し、次にヨモギ属、タンポポ亞科が多い。また、アリノトウグサ属—フサモ属、ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属やソバ属が検出される。樹木花粉は少なく、マツ属複維管束亞属、ブナ属、コナラ属コナラ亞属などが出現する。

2) II 帯 (F2層)

草本花粉の占める割合が非常に高く、下帯と同様な特徴を示す。樹木花粉は、マツ属複維管束亞属が増加し、スギが出現する。他に、コナラ属コナラ亞属、ブナ属、ハンノキ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、カバノキ属、クマシデ属—アサダ、クリなど多様に出現する。

3) III带 (I層、II'層)

草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ科、ヨモギ属が優占する。他に、カヤツリグサ科、タンボボ亜科、アブラナ科、ナデシコ科、アカザ科ヒュウ科などが出現する。また、ソバ属が検出される。樹木花粉はスギが増加し、マツ属複維管東亜属もやや多い。他に、ハンノキ属、カバノキ属などが検出される。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉群集の特徴とその変遷から推定される植生と環境を花粉分帯に沿って記す。F 3層、地山より採取された堆積物は花粉密度が非常に低い。これは、堆積速度が速かったか、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境により花粉が分解され失われたためと考えられる。

1) I帶 (F 4層)

周囲はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンボボ亜科などの草本が繁茂する開地の環境が示唆される。これらの草本は人里植物ないし耕地雑草の性格を持つことから、人為環境が分布していたと考えられる。特に、ソバ属とササゲ属が検出されることから、ソバやマメ類の栽培が行われていたと推定される。また、アリノトウグサ属一フサモ属、ガマ属ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属は抽水植物であるため、堀は滞水しており、これらの植物が堀内に生育していたと考えられる。周辺地域の森林植生としては、マツ属複維管東亜属(ニヨウマツ類)やブナ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹が分布していたと考えられる。

2) II帶 (F 2層)

周囲は下帯と同様な環境であったと考えられ、人為環境の分布が示唆される。特に、ソバ属の検出からソバ栽培が行われていたと考えられる。また、堀内にはアリノトウグサ属一フサモ属、ガマ属ミクリ属、オモダカ属、ミズアオイ属などの抽水植物が生育し、堀は滞水していたと考えられる。周辺地域には、マツ属複維管東亜属(ニヨウマツ類)などの森林が増加したとみられる。生態上、二次林を形成するアカマツが考えられ、二次林が拡大したと推定される。スギが出現することから、造林が行われたと考えられる。

3) III帶 (I層、II'層)

周囲はイネ科、ヨモギ属を主にカヤツリグサ科、タンボボ亜科、アブラナ科、ナデシコ科、アカザ科ヒュウ科などの乾燥を好む人里植物ないし耕地雑草が繁茂する人為環境が分布していたと推定される。特に、ソバ属が検出されることから、ソバの栽培が想定される。また、水生植物は検出されず、堀内もやや乾燥した環境になったと推定される。スギの増加により造林が拡大したと考えられる。

6. まとめ

二階堂氏屋敷遺跡(中世の館跡)の堀跡において花粉分析を行った。その結果、堀内は下位よりI帶、II帶の時期は水生植物の生育する滞水した環境で、III帶の時期には湿地からやや乾燥した環境になったことが示唆された。周辺には乾燥した人為環境が分布し、ソバの栽培が行

われていたようである。周辺地域は、主に落葉広葉樹林が分布するが、Ⅱ带ではアカマツの二次林、Ⅲ带ではスギの造林の拡大が認められた。

参考文献

- 中村 純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 金原 正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60 p.
- 中村 純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91 p.
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村 純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

表1 二階堂氏屋敷遺跡における花粉分析結果

学名	分類群 和名	地跡				
		I層	II層	F2層	F3層	F4層
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束木属	28	6	55		9
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyton</i>	マツ属單維管束木属	1		3		
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	48	11	18		
Taxaceo-Cephalotaxaceo-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			1		
<i>Salix</i>	ヤナギ属			1		
<i>Juglans</i>	クルミ属			2		
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	4	2	7		
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	1	2		2
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ			1		
<i>Castanea crenata</i>	クリ	4		1		1
<i>Fagus</i>	ブナ属			5		5
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ木属	1	17	1	4	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ属			1		
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ			2		2
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			1		
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			1	1	
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木·草本花粉					
Moraceae-Urticaceas	クワ科-イラクサ科	17	9	2		21
Araliaceae	ウコキ科	1				
Nonarboreal pollen	草本花粉					
<i>Typha-Spartanium</i>	ガマ属-ミクリ属			1		1
<i>Sagittaria</i>	オモクサ属			2		1
Gramineae	イネ科	120	165	163	1	114
<i>Oryza</i> type	イネ属型	3	1	25		9
Cyperaceae	カヤツリグサ科	41	36	102	1	124
<i>Anemone</i> keisak	イボクサ			1		
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属			4		2
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サニエタデ節	1		1		1
<i>Rumex</i>	ギンギン属			1		
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属	1		1		1
Chenopodiaceo-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	6	4	1	1	4
Caryophyllaceae	ナデコ科	5	6	2		1
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属			3		
Cruciferae	アブラナ科	16	16	12		8
<i>Vigna</i>	サザゲ属					1
<i>Impatiens</i>	シリフニソウ属			1		
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウゲサ属-フサモ属			1		12
Hydrocotyleoides	チドメグサ属科		2	5		9
Apioideae	セリ科		2	3		1
Labiatea	シソ科			1		
Utricularia	タヌキモ属			1		
<i>Plantago</i>	オオバコ属			1		
Lactucoideae	タンポポ科	20	4	15		11
Asteroideae	キク科	3	4	4		2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	64	138	34	3	65
Fern spore	シダ植物胞子					
Monocolpate spore	単球形胞子	42	23	5		6
Triolate type spore	三球形胞子	2	6	7		8
Arboreal pollen	樹木花粉	87	21	118	1	23
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木·草本花粉	18	9	2	0	21
Nonarboreal pollen	草本花粉	280	380	383	6	367
Total pollen	花粉總數	385	410	503	7	411
	試料1cm ² 中の花粉密度	6.2	5.6	3.5	5.6	3.5
	$\times 10^3 \times 10^3 \times 10^4 \times 10^5 \times 10^6$					
Unknown pollen	未同定花粉	3	4	8	1	7
Fern spore	シダ植物胞子	44	29	12	0	14
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化液滴	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

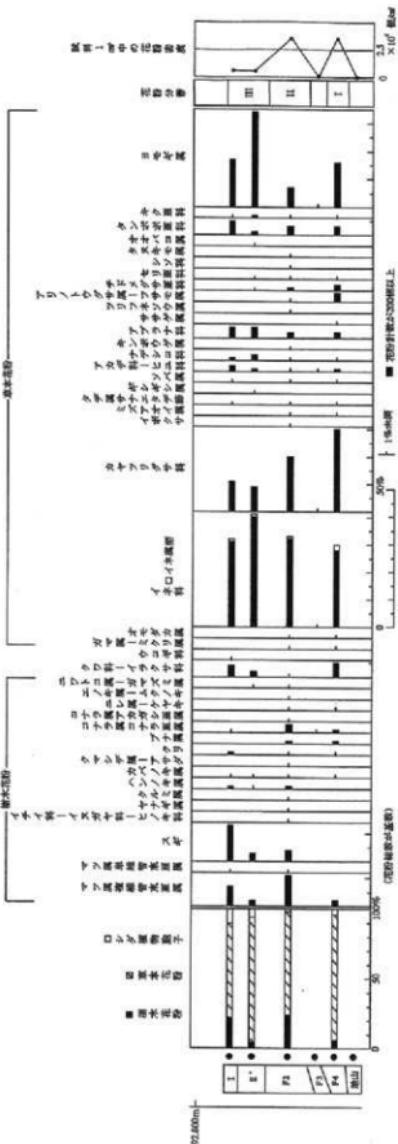


図1 二陰性型免疫細胞、海綿における7E5陽性グラム

二階堂氏屋敷遺跡の花粉



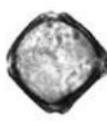
1 マツ属複維管束亞属



2 スギ



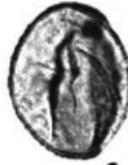
3 クルミ属



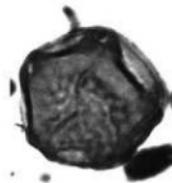
4 ハンノキ属



5 カバノキ属



6 コナラ属コナラ亜属



7 ニレ属一ケヤキ



8 イネ属型



9 カヤツリグサ科



10 イボクサ



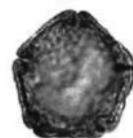
11 ミズアオイ属



12 ソバ属



13 アブラナ科



14 アリノトウグサ属
—フサモ属



15 セリ亜科



16 タンポポ亜科



17 キク亜科



18 ヨモギ属

— 10 μm

II. 二階堂氏屋敷遺跡における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壤、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

2. 試料

試料は、二階堂氏屋敷遺跡（中世の館跡）の堀跡の堆積物で、上位から I 層、 II' 層、 F 2 層、 F 3 層、 F 4 層、地山の各層より採取された 6 点である。

3. 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から 1 cm³ を秤量する。
- 2) 10% 過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、一晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1. 5 時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を 5 、 6 回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で 600 ~ 1500 倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。同定・計数は珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

出現した珪藻化石は、貧塩性種（淡水生種）47 分類群、不明 3 分類群である。計数された分類群の学名と個数を表 1 に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図 1 に示す。分析結果から図に示すような分帯の区分を行った。

1) I 帯 (F 4 層)

Tabelliana fenestrata-flocculosa、 *Eunotia minor* などの沼澤湿地付着性種群や *Fragilaria constricta v. venter*、 *Cymbella spicula* などの止水性種が優占する。他に、中～下流性河川指標種群、流水性種の *Navicula decussis*、 *Gomphonema parvulum* も出現する。

2) II 帯 (F 2 層)

止水性種の *Fragilaria constricta v. venter*、 *Fragilaria constricta*、 *Cymbella gracilis* が多く出現

する。他に中～下流性河川指標種群、流水性種の*Navicula decussis*、*Cymbella minuta*、*Gomphonema parvulum*や各生態性が不定性の*Fragilaria exigua*、*Rhopalodia gibberula*などが検出される。

3) III带 (I層、II'層)

陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Navicula contenta*、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*の出現率が高い。また、*Fragilaria constricta v. venter*などの止水性種や*Meridion circulare v. constrictum*などの中～下流性河川指標種群や流水性種も低率に出現する。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

1) I带 (F 4層)

沼沢湿地付着性種群、止水性種が優占し、中～下流性河川指標種群、流水性種が伴われることなどから、堆積当時堀は滞水しており、沼澤あるいは湿地の環境を呈していたと考えられる。

2) II带 (F 2層)

止水性種を主に中～下流性河川指標種群、流水性種や各生態性が不定性の珪藻も検出されることから、当該時期も堀は滞水しており、沼沢から湿地の環境を呈していたと考えられる。

3) III带 (I層、II'層)

陸生珪藻の出現率が高く、止水性種、中～下流性河川指標種群や流水性種も低率に出現することから、止水や流水の影響を若干受ける湿地の環境が考えられる。

6. まとめ

二階堂氏屋敷遺跡（中世の館跡）の堀跡において珪藻分析を行った。その結果、下位のF 4層（I帶）、F 2層（II帶）の堆積時は滞水した環境が示唆され、III帶になると止水や流水の影響を若干受ける湿地の環境であったことが推定された。

参考文献

Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.

Patrick, R. eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.

Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.

Patrick, R. eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.

Asai, K. &, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Eco-

- logical Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.
- 小杉 正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p. 29-44.
- 小杉 正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1-20.
- 安藤 一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-45.

表1 二階堂氏屋敷遺跡における珪藻分析結果

分類群	測定					地山
	F1層	F1'層	F2層	F3層	F4層	
貧栄性種(淡水生種)						
<i>Achnanthus lanceolata</i>					1	
<i>Amphora copulata</i>	1		1		4	
<i>Aulacoseira sp.</i>			2			
<i>Caloneis silicula</i>			3		2	
<i>Cymbella gracilis</i>			6			
<i>Cymbella minuta</i>			2	1	1	
<i>Cymbella naviculariformis</i>	1		3		2	
<i>Cymbella silesiaca</i>			2			
<i>Cymbella spinula</i>					6	
<i>Cymbella subaequalis</i>			3			
<i>Cymbella turgida</i>					1	
<i>Diploneis elliptica</i>			3		1	
<i>Eunotia minor</i>			3		11	
<i>Eunotia soleirolii</i>			1			
<i>Fragilaria capucina</i>			3		6	
<i>Fragilaria construens</i>			9			
<i>Fragilaria construens v. subsalina</i>			2		3	
<i>Fragilaria construens v. venter</i>	7	2	27		11	
<i>Fragilaria exigua</i>	1		8			
<i>Fragilaria pinnata</i>	1		1		2	
<i>Gomphonema acuminatum</i>					1	
<i>Gomphonema clavatum</i>			1			
<i>Gomphonema clevei</i>			1			
<i>Gomphonema gracile</i>			1			
<i>Gomphonema minutum</i>			1			
<i>Gomphonema parvulum</i>			2	3	7	
<i>Gomphonema truncatum</i>					2	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	12	5				
<i>Metidium circulare v. constrictum</i>	1		1		2	
<i>Navicula contenta</i>	22	4			1	
<i>Navicula decussis</i>				7	6	
<i>Navicula elongensis</i>					2	
<i>Navicula kotschy</i>	1					
<i>Navicula mutica</i>	41	19	2		2	
<i>Navicula pupula</i>			2		1	
<i>Navicula viridis v. rostellata</i>					1	
<i>Neidium bisulcatum</i>			1			
<i>Pinnularia borealis</i>	12	8			1	
<i>Pinnularia gibba</i>			1		2	
<i>Pinnularia glacieps</i>					1	
<i>Pinnularia interrupta</i>			1			
<i>Pinnularia microstauron</i>					2	
<i>Pinnularia viridis</i>					4	
<i>Rhopakodis gibberula</i>			6		5	
<i>Stauromis phoenicenteron</i>					1	
<i>Synedra ulna</i>			1		1	
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>					15	
不明						
<i>Diploneis</i> sp.				2		
<i>Fragilaria</i> sp.				2		
<i>Orthosira</i> sp.		1				
合計	101	40	112	1	109	0
未同定	9	1	13	0	16	0
破片	54	14	84	0	56	0
試料 1 cm ² 中の個数密度	4.3	1.6	2.3	2.0	1.2	-
	$\times 10^4$					
完形殻保存率 (%)	67.1	74.5	59.8	100.0	69.1	-

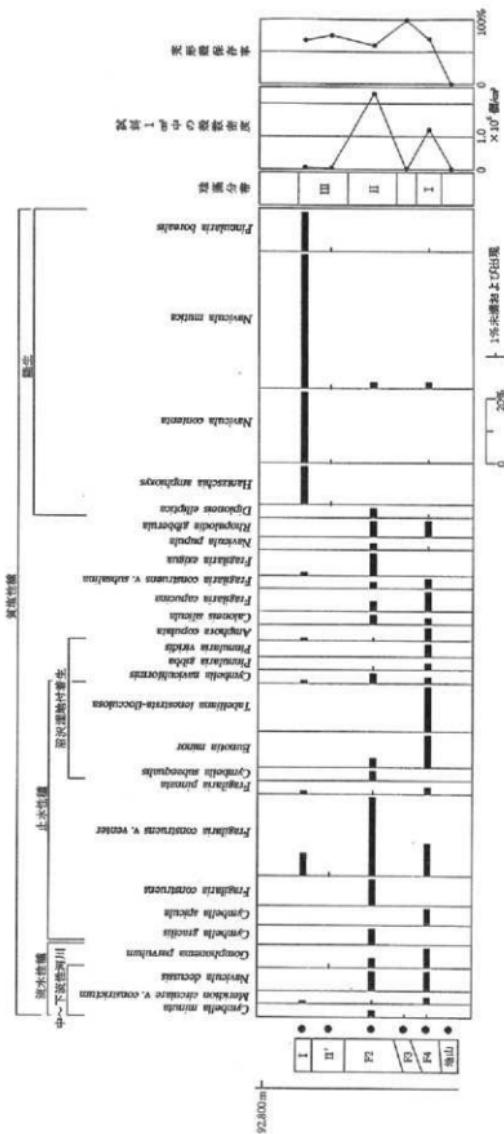
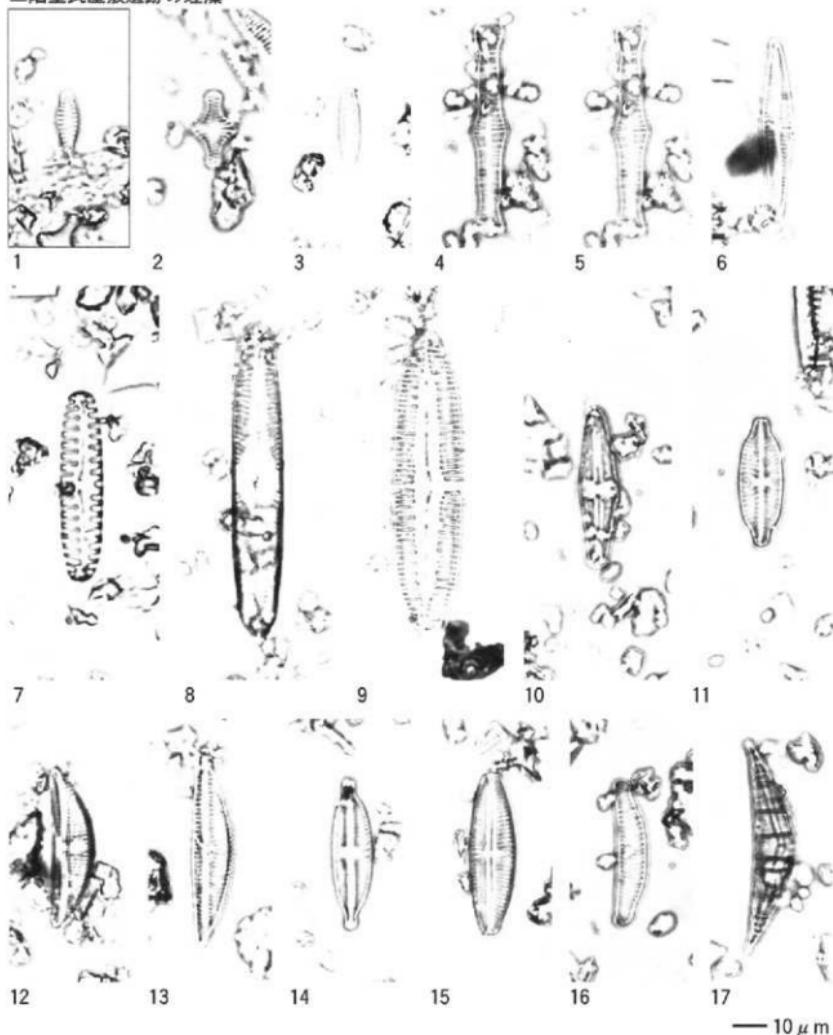


図1 二階堂氏屋敷遺跡、堀跡における主要珪藻ダイアグラム

二階堂氏屋敷遺跡の珪藻



1. *Fragilaria construens* v.*venter* 2. *Fragilaria construens* 3. *Fragilaria exigua* 4. *Fragilaria capucina*
 5. *Tabellaria fenestrata-flocculosa* 6. *Gomphonema gracile* 7. *Pinnularia borealis* 8. *Pinnularia gibba*
 9. *Pinnularia viridis* 10. *Navicula mutica* 11. *Navicula decussis* 12. *Amphora copulata* 13. *Cymbella gracilis*
 14. *Cymbella naviculiformis* 15. *Cymbella subaequalis* 16. *Eunotia minor* 17. *Rhopalodia gibbera*

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第102集

にかいどうじやしき
二階堂氏屋敷遺跡発掘調査報告書

2002年3月25日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 山形印刷株式会社
